

大船渡地区津波復興拠点整備事業

まちづくりワーキンググループ 第5回資料

平成25年1月16日

大船渡地区津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループ

大船渡地区津波復興拠点 整備に向けての提言書

(案)

平成25年1月16日

大船渡地区津波復興拠点整備事業

まちづくりワーキンググループ

目 次

はじめに	1
1. 津波復興拠点が果たすべき役割	2
(1) 大船渡地区の復興まちづくりの目標	
(2) 津波復興拠点の果たす役割	
2. 津波復興拠点に必要な機能	3
(1) 安全・安心を確保するための防災機能	
(2) 広域商業拠点として必要な機能	
3. 津波復興拠点整備イメージ図への提言	9
4. 津波復興拠点の実現に向けて	10
(1) 今後の具体的検討に向けて	
(2) 高齢者施設の整備について	
資料1 施設配置の検討案	12
(1) 商業施設、駐車場の集約案	
(2) 核店舗を配置した案	
(3) 海側に産直市場を配置した案	
資料2 検討の経過	16
(1) 大船渡地区津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループ委員名簿	
(2) ワーキングの経過	
(3) 議事要旨	

はじめに

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災により、気仙地域の広域商業拠点として位置づけのある大船渡市の中心市街地「大船渡地区」は、壊滅的な被害を受けました。

市は、この復興策として、被災市街地復興土地区画整理事業による復興まちづくりを進める中、その中核となる当該事業区域内の一定区画について、津波からの防災性を高め、復興を先導する拠点となる市街地を形成するため、あらたに津波復興拠点整備事業を導入することとし、検討を行うためにワーキンググループを設置しました。

私たち、大船渡地区津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループは、津波復興拠点が果たすべき役割、必要な機能について平成 24 年 10 月から 5 回にわたり、拠点整備に向けた方向性について検討を重ね、今般、この検討の成果を提言書として取りまとめました。

この提言書は、事業の趣旨に鑑み、大船渡地区において、災害時の都市機能を維持する防災活動拠点や商業・業務機能の早期復興をけん引する拠点形成にあたり必要となる考え方や、今後この地に暮らす多くの方々に、夢や希望を育むことができる機能などを整理したものです。

なお、提言書の内容は、関係機関との調整や実現性、経済性についての検証・合意を踏まえたものではありませんが、被災前より魅力的で、次世代に夢や希望が持てるまちになってほしいという願いを込めて、委員それぞれが意見を出し合い、検討した結果であります。

私たちの熱い思いを真摯に受け止めていただき、この提言を拠点施設の具体的な計画検討を進める中で是非とも反映していただきますよう、お願いし提言書といたします。

平成 25 年 1 月 16 日

大船渡地区津波復興拠点整備事業
まちづくりワーキンググループ一同

1. 津波復興拠点が果たすべき役割

(1) 大船渡地区の復興まちづくりの目標

<まちづくりの目標>

「誰もが安心して楽しみ、交流できる、商業・業務・観光の中心地の創出」

- ・ 一日も早い商業・業務、生活の再建を実現するまち
- ・ 被災前よりも安全で、美しく、魅力的なまち
- ・ 次世代の市民が健やかに育ち暮らせるまち
- ・ 高齢になっても障がいがあっても、楽しめるまち
- ・ まちの歴史や災害の教訓を後世に伝えるまち

(2) 津波復興拠点の果たす役割

災害時の都市機能を維持する「防災活動拠点」

- ・ 再度の大津波によって浸水が想定される地域の「一次避難場所」
- ・ 発災時の応急救護や一定期間の避難者の収容やケアを行う「避難所」

先行整備による商業・業務の復興と市全体の復興を「けん引」

- ・ 大船渡の玄関口としての「まちの顔」
- ・ 新たな雇用と交流の「創造」
- ・ 生活の利便性と楽しみの「提供」

2. 津波復興拠点に必要な機能

(1) 安全・安心を確保するための防災機能

津波復興拠点を、いつでも、誰でも、安心して訪れることのできる場所とするためには、災害時の安全性が確保されていることが前提となります。

また、災害が起きても、都市機能を維持する拠点となる防災活動施設が必要です。

同時に、この災害を後世に伝え、地域防災力を向上させるためにも、平時においても活用していくことが必要です。

①避難の安全性確保のための機能

ア 津波復興拠点区域内の安全な避難経路の確保

- ・祭やイベントなど多数の市内外からの来訪者が集中している場合でも、誰もが安全・迅速に避難できる避難経路を整備する。
- ・観光客にもわかりやすい避難誘導、避難意識啓発を行う。
- ・障がいがあっても円滑に避難ができるよう、バリアフリーの避難経路を整備する。

イ 市街地全体の避難の安全性確保

- ・国道 45 号の渋滞解消方策を検討する。
- ・自動車による避難と徒歩避難の動線を分離する。
- ・国道 45 号などの幹線道路を避難者が容易に横断できるような対策を講じる。
- ・多数の避難者にも対応できる、山側での避難場所となる公園などを整備する。

②津波防災拠点施設の防災機能

ア 災害時の避難場所としての機能

- ・津波災害時の避難場所としての機能を確保する。
- ・津波防災拠点から直接、JR 大船渡線の山側へ避難できる動線を確保する。
- ・避難所となる屋内空間、食糧や物資などの備蓄、電力・通信などライフライン機能を確保する。
- ・医療救護活動や、高齢者、障がい者・障がい児、妊産婦、乳幼児など災害弱者へのケアを行うことのできる機能を確保する。
- ・後方医療機関への搬送や物資の輸送ができる機能を確保する。
- ・再生エネルギー利用などにより、災害時のライフライン機能維持に必要な電力を確保する。

イ 平常時の防災学習施設としての機能

- ・災害資料の保存・展示、体験学習を行うことのできる、津波災害に関する研修機能を確保する。
- ・東日本大震災の津波浸水深や浸水範囲を表示するなど、今次災害の教訓を後世に伝える。

安全・安心を確保するための防災機能の例

機能	施設や仕組み	備考
避難機能	避難路となる広幅員道路の整備と無電柱化 幹線道路の横断に配慮した動線の確保 山側や幹線道路への出入口 避難経路のバリアフリー化 わかりやすい避難誘導サイン、誘導灯 災害時の出入口を確保した駐車場 まち歩き・避難マップ	円滑で迅速な避難の実施 自動車による避難へも配慮
輸送機能	ヘリポート	負傷者の後方搬送、物資調達
情報収集伝達機能	展望室 衛星電話などの通信手段	津波の状況把握と情報伝達
避難所機能	避難所となる屋内空間 高齢者、障がい者・障がい児、妊産婦、乳幼児など災害弱者へのケア空間 感染症患者へのケア空間 マンホールトイレなど災害時にすぐ使用でき、災害弱者に対応したトイレ	災害弱者の避難の安全を確保、避難所としての数日間の運営を想定
備蓄機能	飲料水、食糧、物資などの備蓄	避難所運営に必要な物資などの備蓄
応急救護機能	医療モール、薬局	応急救護の実施と医薬品のランニングストックを確保
ライフライン維持機能	マイクログリッドシステム (※)	災害時の電力確保による通信機能などの維持
平常時の学習機能	防災資料室、シアター 研修室、体験学習室 常駐の防災アドバイザー	災害資料の収集・保存、防災学習・意識啓発

※マイクログリッドシステム

太陽光発電・風力発電・バイオマスなど、CO2 排出量の少ない発電施設に蓄電池などを組み合わせ、地域内電力需要の一定割合をまかなう仕組み。情報通信技術を活用して地域内のエネルギー供給を管理するのが特徴。

(2) 広域商業拠点として必要な機能

広域商業拠点であった大船渡地区では、多くの商店や事業所が被災し、それら商店などは、一日も早い再建を望んでいます。

市民生活の利便性向上に寄与し、かつ、市内外からの交流人口を呼び込む広域拠点として、被災前よりも魅力的で、美しい、大船渡の個性を活かした商業拠点としていくことが必要です。

①広域商業拠点としての早期再建と顔づくりのための機能

ア 広域商業拠点としての早期再建の推進

- ・ 先行整備や官民連携により、被災した事業所などの早期再建を支援する。
- ・ 核となる大型店舗などにより、集客力を確保する。

イ 大船渡らしい美しい街並みの整備

- ・ ランドマークとなり、大船渡の「まちの顔」としての機能を確保する。
- ・ 「まちの軸」となるメインストリートの街並みを形成する。
- ・ 大船渡湾、須崎川や山の景色と調和した、緑豊かな美しい景観を確保する。

ウ 自然にやさしい機能の確保

- ・ 太陽光や風力発電など、自然にやさしい再生エネルギーを活用する。

早期再建と顔づくりのための機能の例

機能	施設や仕組み	備考
早期再建推進機能	大規模店舗 官民の連携と役割分担による整備 身の丈にあった規模設定 貸し店舗など開業したい事業者が 参画できる仕組み	大規模店舗の誘致による集客力の確保 事業者の再建への負担軽減に配慮する一方、事業者のやる気を引き出す仕組みを導入 将来的にも維持できる規模を想定し、出店希望者を受け入れる仕組みを整備することで持続性を確保
景観機能	まちの顔、まちの軸の設定 大船渡らしい景観形成のためのガイドラインやデザインコード 花やみどりの季節感を演出する植栽（桜並木、椿、良好な維持管理など） ランドマークの整備 客船からの眺望を意識した景観形成	海から見ても陸地から見ても美しい街並みづくりが必要 気仙のまちなみなど、個性ある景観形成で魅力を創出
環境共生機能	マイクログリッドシステムの導入 再生エネルギーの活用 建物の省エネ化	

②多世代が楽しめる拠点の形成に向けた機能

ア 交流機能の確保

- ・乳幼児、若者、親子連れ、高齢者など、あらゆる世代が楽しみ、交流することを支援する機能を確保する。
- ・移動空間に屋根を設置するなど、雨天や冬季でも支障がないよう配慮する。
- ・誰もが利用しやすくなるよう、移動の円滑性や施設のバリアフリー機能を確保する。

多世代が楽しめる拠点の形成に向けた機能の例

機能	施設や仕組み	備考
交流支援機能	多目的スペース カルチャーセンター、文化活動を行う施設 工芸品や市民の作品などの展示スペース イベントスペース 学生の自習スペース、図書室 軽運動場、トレーニングルーム キッズルーム、児童遊園（遊び場） 相談窓口（子育て、妊産婦など） ベンチなど休憩施設	多様な世代の交流活動やケア活動を行い、市民の健やかな生活を支援 ベンチなど休憩施設の配置により、来街者相互の交流空間も創出
移動円滑機能	バリアフリー化 歩車共存の道路 施設を利用する際の利便性の高い位置への駐車場確保 アーケードのような、雨天でも買物しやすい空間（天候への配慮）	誰もが安心して施設を利用できる工夫を確保 雨天でも傘をささずに移動できる工夫を確保

③日常利用を高める魅力づくりのための機能

ア 生活支援機能の確保

- ・生活に必要な買物ができる商店、金融機関、医療施設・薬局、交番など、暮らしを支援するための機能を、商圈に見合った規模で確保する。
- ・多世代のニーズに応えるための、保育や介護など福祉機能を備え、多様な形態や業種の商業集積を図る。

日常利用を高める魅力づくりのための機能の例

機能	施設や仕組み	備考
商業・業務機能	食材、生活雑貨などを扱う商店 金融機関 医療施設、調剤薬局 マタニティ・ベビー用品店 本・レンタルビデオ、家電販売店 アミューズメント施設、映画館	日常生活を支援するとともに、多様な世代にとって魅力となる娯楽機能も確保
行政機能	住民票や印鑑証明の交付など簡単な行政手続きができる仕組み 交番	生活に密着した行政機能を確保
福祉機能	託児・託老所 だれでもトイレ	乳児を抱える母親や介護者の買物を支援

④広域的な来訪者を誘導する魅力づくりのための機能

ア 交通機能の確保

- ・鉄道、バスやタクシーなど公共交通機能と、適切な台数の駐車場を整備し、市内外からの来訪者の交通の利便性を確保する。

イ 大船渡の個性を活かした観光機能の確保

- ・海や魚など大船渡市の特産品を活用した観光の目玉となる機能を確保する。
- ・研修、祭り、イベントなどを開催することのできる機能を確保する。
- ・歩行動線をイメージした施設配置により、拠点区域内の回遊性を確保する。

広域的な来訪者を誘導する魅力づくりのための機能の例

機能	施設や仕組み	備考
交通機能	駅、バスステーション（高速バス、コミュニティバス） タクシー乗り場 レンタサイクル 商業施設の規模に適した台数の駐車場 ガソリンスタンド 鉄道やバスの定期券販売所	駅に集まる観光客の市内観光の利便性を確保 自動車で訪れる人の利便性を確保 公共交通利用者の利便性を確保
観光機能	海や魚など地場の特産品を売る店 宿泊・研修施設 イベントスペース モニュメント 災害の記憶を残す資料などの展示 温泉施設 グラウンドやランニングコースなどのある運動公園 観光案内所 拠点区域内の回遊性を生み出す施設配置とまち歩き・避難マップ	大船渡の特性に特化した観光資源の創出と新たな観光資源の創出 宿泊機能を強化し、交流人口の拡大と観光産業の振興を支援 スポーツ大会などの開催で市内外からの来街者の増加に寄与 歩行者の回遊性を生み出す施設配置でリピーターを確保

3. 津波復興拠点整備イメージ図への提言

津波復興拠点全体

【まちづくりの視点】

- ・ まちづくりの全体コンセプトが必要
- ・ 美しい建物、まちなみ、花木等植栽
- ・ ランドマーク性
- ・ 再生可能エネルギーの活用
- ・ 回遊性ある歩行者動線

【利用者の視点から必要な機能】

- ・ 安全な避難ルートの確保
- ・ 一次避難スペース、災害弱者への対応(トイレ、間仕切り、感染症対策など)
- ・ 防災安全を伝えるソフトの整備も大切
- ・ 車利用を前提とした施設計画
- ・ 総合的なアミューズメント施設や映画館などの幅広い層が使える娯楽施設
- ・ 24時間、明かりの消えない街
- ・ ベンチ、子どもの遊び場
- ・ バリアフリー
- ・ 以前の機能「プラスアルファ」の魅力
- ・ まちの案内所

【産業振興の視点から必要な機能】

- ・ 魚を観光資産として取り入れる
- ・ ホテルとの連携

C・E：商業業務施設

- ・ 核店舗を中心とした商業集積
- ・ 商業店舗の集約化（分散させない）
- ・ 平日中心の集客
- ・ マタニティ、ベビー用品を扱う店舗
- ・ テナント店舗（入居者の負担少）
- ・ 南側（Hブロック）への人の流れ
- ・ 金融機関、住民票等自動交付機
- ・ 電車やバス定期券販売所

B：津波復興拠点支援施設

- ・ 子育て支援拠点（子育て休憩所等）
- ・ 多目的スペースの確保
- ・ 交流スペース、作品展示スペース
- ・ 木工技術など工芸品の展示
- ・ 図書室・自習コーナー
- ・ 屋内運動施設（介護予防）
- ・ 託児・託老所

A：津波防災拠点施設

- ・ 高齢者向け施設は設置しない
- ・ 必要最低限の備蓄
- ・ 避難場所、避難所機能
- ・ ヘリポート
- ・ 展望台
- ・ 災害資料の展示、シアター、体験学習等研修機能

H：商業施設、水産加工施設等

大船渡駅

イメージ図

D：観光施設（道の駅）

- ・ 海に特化した大船渡らしい施設
- ・ 魚など特産品を扱う物産館
- ・ 温浴施設

F：交流広場・親水広場

- ・ 桜並木→区域全体にも拡大
- ・ 水辺の空間
- ・ イベントの出来るスペース
- ・ ベンチ
- ・ 子どもの遊び場

駐車場関連

- ・ 駐車場の集約化
- ・ 利用に応じた台数確保
- ・ 駅前への駐車場配置、タクシー待機場所の確保
- ・ 駐車場スペースのイベント利用
- ・ 自動車避難用出入口

道路・歩道

- ・ 避難歩道橋の設置
- ・ 敷地・道路接続部の段差対策
- ・ 無電柱化
- ・ 避難誘導サイン、夜間照明



4. 津波復興拠点の実現に向けて

(1) 今後の具体的検討に向けて

津波復興拠点は、市全体の復興をけん引する拠点であることから、一日も早く事業を実現させる必要があります。

津波復興拠点は、大きくは公共公益施設である津波防災拠点施設、津波復興拠点支援施設、地域経済の復興を支え、新たな雇用と産業振興を促す商業・業務施設、観光施設で構成されることになっています。

津波防災拠点施設、津波復興拠点支援施設の整備に向けては、必要とされる防災機能の精査とその機能を確保するための施設規模や設備、市民の交流活動に照らした交流空間の規模などを具体的に決め、設計する必要があります。

商業・業務施設、観光施設の整備に向けては、事業者の出店意向や商店街の合意形成、商業需要の把握、官民の役割分担など、様々な具体的検討が必要となります。

さらに、拠点全体としての魅力を高める必要があり、今後も継続して商業・業務の広域拠点として持続していくためには、事業継続・運営、維持管理、連携のため、拠点全体のエリアマネジメントや事業スキームが必要となります。

そのため、今後は、次の3つのワーキングチームを設置し、具体的な設計につながる検討を行っていくことを提言します。

一方、建築物の配置等については、「3. 津波復興拠点整備イメージ図への提言」にとらわれることなく、拠点全体の魅力を高めるための検討を継続することが必要と考えます。

今後の具体的検討に向けての3つのワーキングチーム

津波復興拠点エリアマネジメントワーキング

- ・津波復興拠点全体に魅力を向上させるよう共通なコンセプトを取りまとめ、以下のワーキングの考え方に基づき、維持管理・運営等を検討し、一体的な整備と持続性ある運営に必要な仕組みやまちづくり会社などの体制の構築につなげる。

津波防災拠点施設・津波復興拠点支援施設検討ワーキング

- ・津波防災拠点施設、津波復興拠点支援施設について、具体的な防災機能、交流機能について検討し、施設設計につなげる。

商業・業務・観光施設検討ワーキング

- ・商業・業務・観光施設について、配置や規模、業種構成などについて検討し、施設設計につなげる。

(2) 高齢者施設の整備について

津波復興拠点の整備イメージでは、シルバー人材センター、高齢者介護施設や高齢者コレクティブイハウスなどの配置が示されていました。

しかし、津波復興拠点の整備は、浸水が想定される区域を予定していることから、迅速な避難が困難な災害弱者が多数集まり、かつ、長時間滞在する施設の配置はなじまないと考えます。

しかし、大船渡市の高齢化の進行は著しく、高齢になっても住み続けられる住宅や住環境の整備は、先送りできない重要課題であると考えます。

そのため、これらの機能は、津波復興拠点に近い、津波の危険のない山側の市街地に確保し、ハード整備での対策を実施するとともに、医療・介護のソフト対策を含めた支援方策を検討することを提言します。

資料 1. 施設配置の検討案

(1) 商業施設、駐車場の集約案



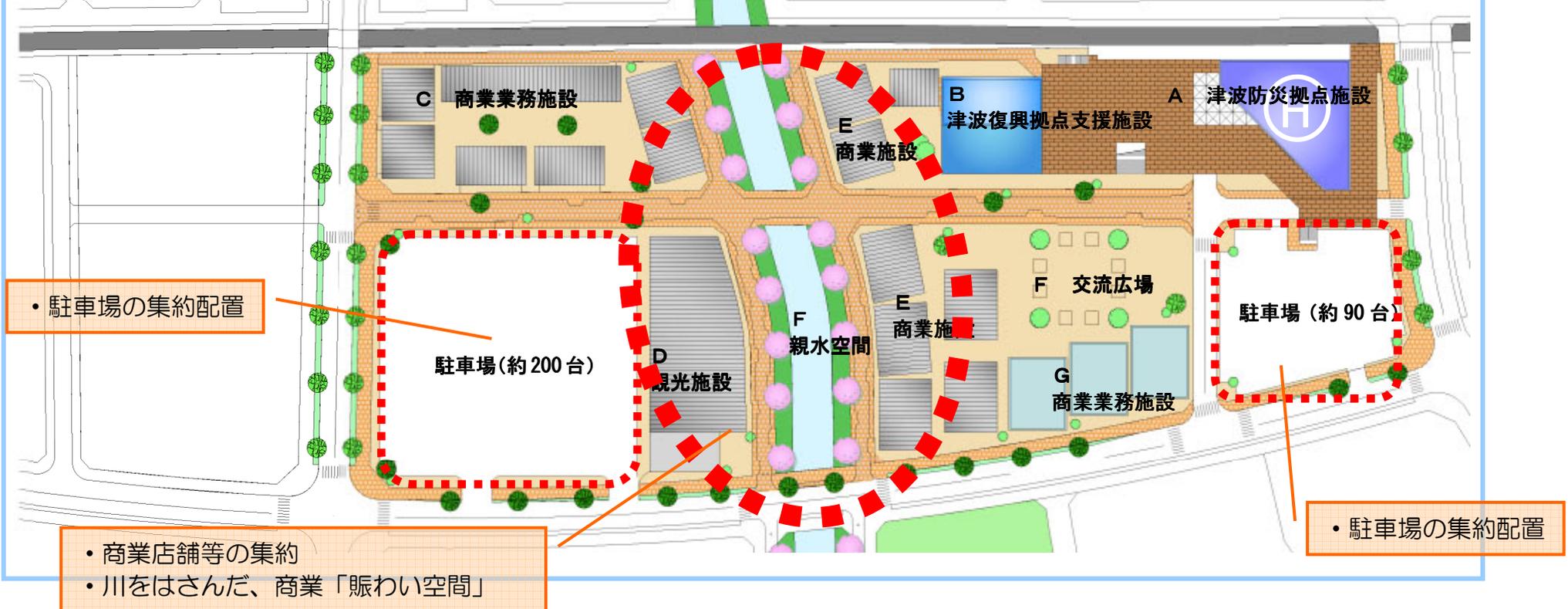
川沿いのオープンカフェの例 (写真出典 京橋川オープンカフェ事業概要 広島市)

■ポイント

- ・須崎川沿いに商業施設、観光施設を集約させることで、川沿いの魅力を取り込む空間づくりが可能
- ・駐車場を駅前と観光施設側に配置することで、駐車台数と自動車での来訪への利便性が向上

■課題

- ・駅前に駐車場が配置されるため、駅前の顔としての景観形成を検討する必要がある



(2) 核店舗を配置した案

核となる大規模店舗を、隣接する拡大区域に配置した案と、津波復興拠点区域内に配置した案の、2案を作成しました。

①核店舗を拠点区域外に配置する案



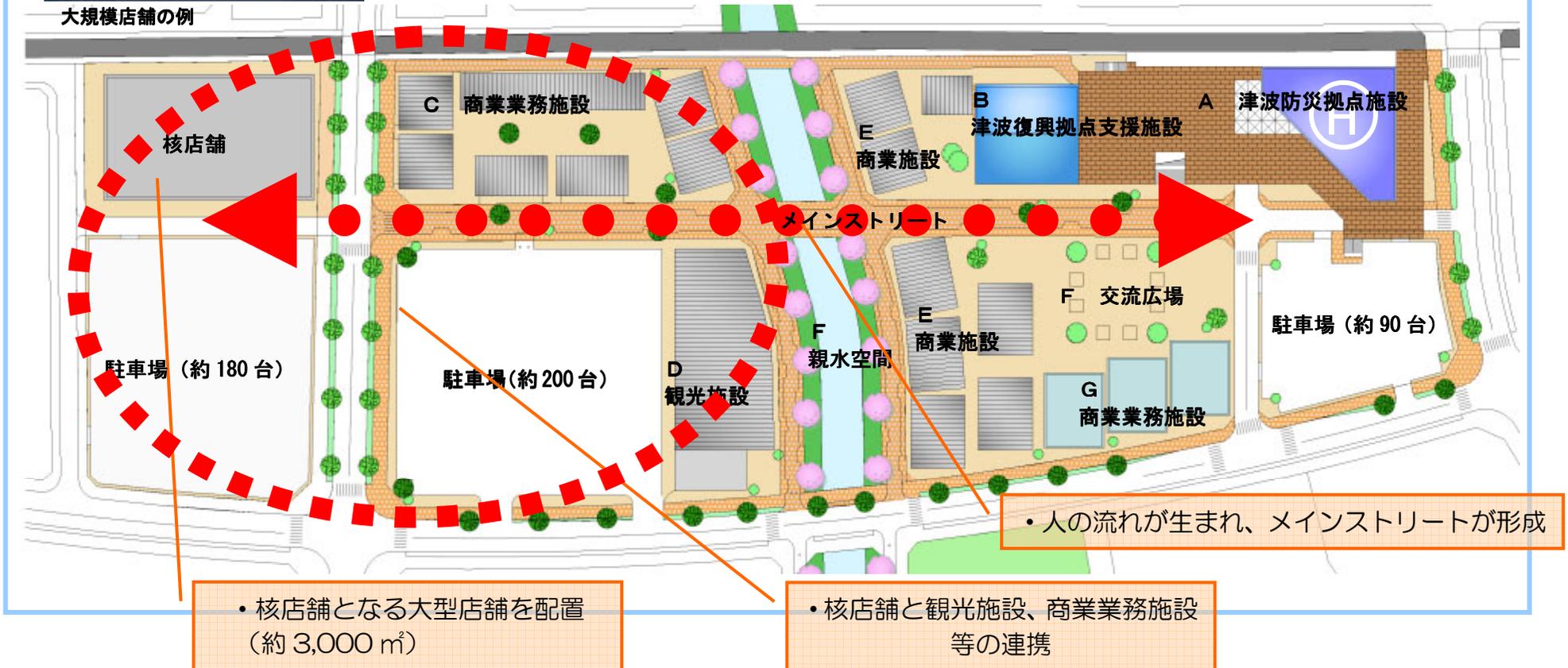
大規模店舗の例

■ポイント

- ・核となる大規模店舗の誘致により、集客力が向上
- ・観光施設と核店舗、商業業務施設の連携で賑わい創出
- ・津波防災拠点施設から核店舗までの「メインストリート」が形成

■課題

- ・人の流れを誘導する「メインストリート」の魅力化が必要（歩き疲れを感じさせない楽しい街並み形成を演出）
- ・事業区域の（段階的）拡大するための、事業展開スケジュールが必要



②核店舗を拠点区域内に配置する案



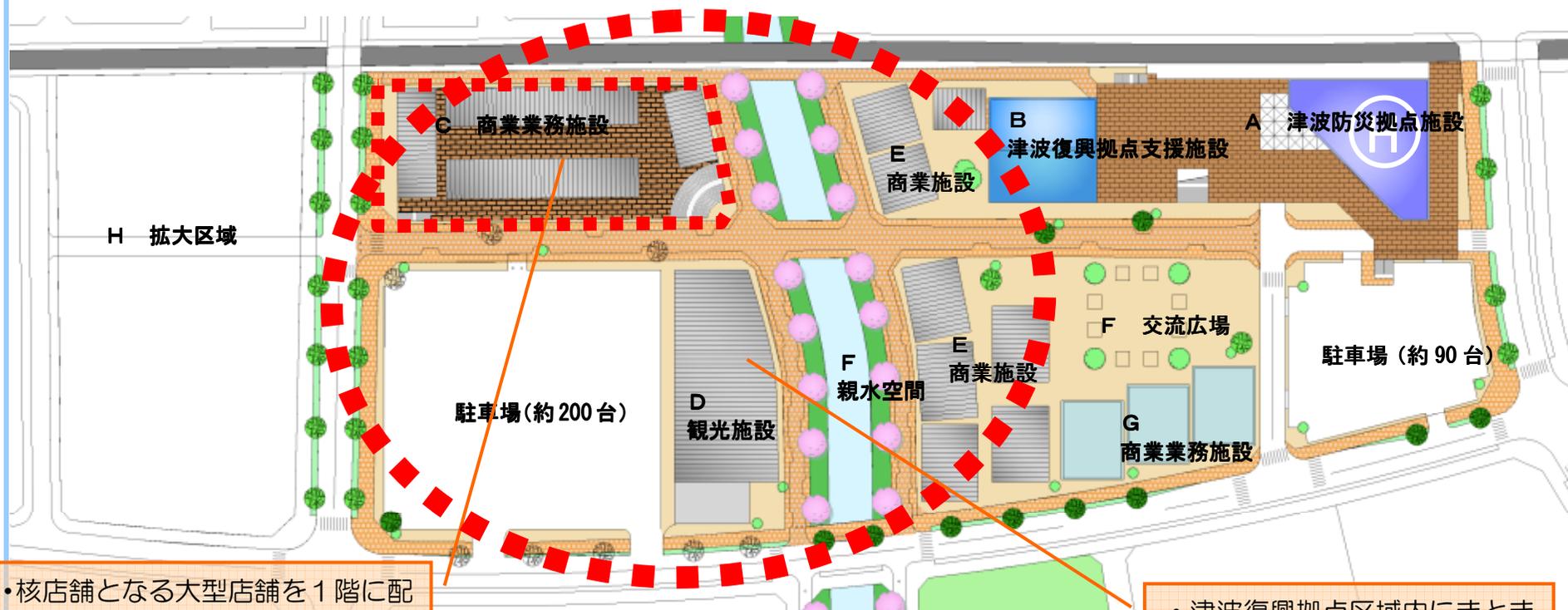
まとまりある商業空間の例

■ポイント

- ・核となる大規模店舗の2階に商業業務施設を配置し、まとまりある商業空間を形成
- ・Cゾーンの商業業務施設では、須崎川を見下ろす水際景観が特色

■課題

- ・核店舗と商業業務施設の所有区分、監理区分が複雑
- ・核店舗2階の商業業務施設の利用勝手、面積確保に課題
- ・拡大区域（Hゾーン）と津波拠点区域との連続性を確保する方策検討が必要



・核店舗となる大型店舗を1階に配置、商店街を2回に配置

・津波復興拠点区域内にまとまりある商業空間が形成

資料2 検討の経過

(1) 大船渡地区津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループ委員名簿

所属	役職	氏名
独立行政法人 中小企業基盤整備機構	アドバイザー	久場 清弘
一般社団法人 東日本未来都市研究会	まちづくり専門家	西郷 真理子
大船渡商工会議所	商業者代表	伊東 修
大船渡観光物産協会	事務局長	新沼 信男
大船渡消防署	警防担当主幹	佐々木 輝昭
大船渡市消防団	第二分団長	志田 寿
大船渡地区公民館	館長	鈴木 佑典
ママ&ベビーサロン大船渡こそだてシップ	代表	伊藤 怜子
大船渡市ささえあい長寿推進協議会	委員	金野 寿江
企画調整課	企画係長	炭釜 秀一
港湾経済課	主任	武田 貴子
商業観光課	商業係長	伊勢 徳雄
地域福祉課	主任	白土 美都
保健介護センター	保健師	平野 智美
防災管理室	防災管理室係長	鈴木 宏延
オブザーバー委員		
一般社団法人 東日本未来都市研究会	コンパクトシティ分野検討 チーム コーディネーター	矢野 信吾
独立行政法人 都市再生機構	岩手震災復興支援局 大船渡支援事務所総括役	小野 親一
パシフィックコンサルタンツ株式会社	東北マネジメント事業部 地域政策室長	佐藤 勝幸

(2) ワーキングの経過

回数	日時	検討内容
第1回	平成24年10月30日(火) 午後1時30分～4時	●津波復興拠点整備に向けた意見交換
第2回	平成24年11月14日(水) 午後1時30分～4時	●津波復興拠点整備の基本的な考え方や導入する機能について
第3回	平成24年11月28日(水) 午後1時30分～4時	●津波復興拠点に導入する機能と公共公益施設に配置する機能について
第4回	平成24年12月19日(水) 午後1時30分～4時	●提言書素案の検討
第5回	平成25年1月16日(水) 午後1時30分～4時	●提言書の取りまとめと市への提出について

第1回津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループ 議事要旨

平成24年10月30日(火)午後1時30分～3時45分

市役所1階 第一会議室

1. 開会(事務局)	
2. あいさつ(副市長)	
3. 資料説明(事務局)	
4. 意見発表	
委員名	
伊勢徳雄委員	<p>意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 市の中心地、高工業、高工業の中心が打撃を受けた。市の顔となるのは大船渡町。仮設店舗ができて、商業をがんばってください。新たなまちを作る中で、震災前以上に賑わいある中心街になってほしい。 ・ 拠点エリアが中心の議論となるが、商業の中心地として、区画整理エリアやもっと広いエリアで考える必要がある。 ・ 45号からの車の動線、既存の道路とのつながりも考える必要がある。
伊東 修委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 商店街の要望をお願いしていく立場。商店街の広さと位置、事業再開の早さの説明を受けて持ち帰り、業者等と話し合っていく。 ・ 津波復興拠点のたたき台に示されている商業施設用地のエリアは、旧須崎地区の3分の1の面積しかない。飲食店等が被災前は50数件あったが、入りきらないと思う。業者の場所として、もう少し広く確保できないか。
伊藤恰子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 被災地の赤ちゃん、お母さんへの支援、サービスがいきわたらないので、支援が必要。 ・ 復興の地で赤ちゃんが生まれ、健やかに育つことが大事だと思う。これを支えることでやさしいまちになり、希望にもなる。 ・ 子育て支援サークルが立ち上がっているが、ネットワークでつながる過程が必要。行政に子育て支援課を設けていただきたい。 ・ 未就学児支援は多くあるが、赤ちゃんへの支援は少ない。子育て支援が連携できる子育て支援施設を入れてほしい。
久場清弘委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 商工会議所が7月に大船渡駅周辺の商業集積の再生の検討会を立ち上げ、一定の結論を得た。商工会議所の意向を拠点整備に反映させた。 ・ 土地区画整理事業は再建にかなりの時間を要する。業者は一日も早い事業再開への思いが強い。早期再開の点では、津波復興拠点整備事業はひとつのチャンス。特別な配慮を行政に期待する。 ・ 被災前から人口減少があり、厳しい経営環境にある。身の丈にあった集積規模をめざすべき。過大投資で、後になって維持に苦しむ事態はさけるべき。 ・ 集客力を高めるため大型店を核とした集積をめざすべき。速くからも集客するためには大型駐車場も必要。中心市街地では徒歩客が中心であったが、駐車場確保、車を対象とした土地利用が必要。 ・ 経営の早期再開が可能となるための条件として、土地の買取を前提とした事業、国の支援事業であることから、効果的な役割を期待している。 ・ 地権者、土地利用を担う事業者の協力が必要である。 ・ 高売する人の支えとなる周辺住民が戻ってくる土地利用になるとよい。働く場所も必要である。 ・ 商業と産業の再生について、津波復興拠点整備事業が効果を発揮し、波及していくことを期待している。

熊澤正彦委員	<ul style="list-style-type: none"> 大船渡地区は高齢者等にとって立地条件がよい。この場所で行かずに地域に密着し、自立した生活ができるかを考える。 観光客の集客に対し、3.11の記念館があるとよい。商業・観光は集客が大事で目玉施設が必要である。 高齢者等が集まる施設を、津波が来た場所に設置することはどうか、意見交換をしたい。
西郷真理子委員	<ul style="list-style-type: none"> 衰退傾向の課題解決が復興のポイントである。 住民、住み続けたい人が主体となること、歴史と自然環境を活かすことで、魅力的な賑わいあるまちになる。 都市軸、メインストリートがシンボルとなる。軸線を明確にすると、都市の骨格がはっきりし魅力的になる。メインストリートに機能が集約することで中心性が生まれ、魅力となる。 波及効果が生まれ、周辺をプラスの状況にしていくことが望ましい。 エネルギー、再生エネルギーの問題もあり、この地区でも、環境未来都市の実現に向けた可能性がある。
佐々木輝昭委員	<ul style="list-style-type: none"> 沿岸の消防屯所が流失し、消火力、防災力は低下している。市全体の安全・安心のための防災関連施設が急務である。 先進性をとり入れたまちづくりが必要。 ヘリポートが設置される案はよいことである。ヘリコプターの総重量は5tなので、それに合わせた整備となるが、ドクターヘリはもつと軽い。 防災ヘリは、大船渡病院駐車場、盛川右岸、ドクターヘリは学校校庭に離着陸できる。ヘリポートが増えるのはよい。 モデルケース、住んでみたいと思っまちづくりが必要
志田 寿委員	<ul style="list-style-type: none"> 「人が死なないこと」が大前提。 東日本大震災は、想定外の災害であった。被災後、20分間活動した後は退避するという消防団のルールができた。 ハード面で整備しても、それ以上の災害が来ないとは言えない。命は自分で守る防災教育、訓練など、ソフト面の防災も必要。 道路の幅員、避難路の幅員は広くしてほしい。東日本大震災の時、午後3時頃には、県道には車がいなかったが、国道が渋滞した。車を置いて人だけ移動したことももあり、迂回できる場所、幅員があるとよい。 3階建ての津波防災施設であるが、人員配置はするのか。水門閉鎖も遠隔で行うこととしているので、津波の来るところには、無人で操作できる設備を設けるほうがよい。 土地を収用してもらえらるなら、早くしてほらうが、将来の生活再建が可能となる。
白上美都委員	<ul style="list-style-type: none"> 土地所有者の土地利用に関する意向調査結果によると、住み続けたいと回答している人が4割弱ということで、驚いている。 震災後は盛町から南には行かなくなった。盛町から北側で、スーパー、学校、病院、飲食店もあり、生活できる。被災したところに行っていない。昼間でも怖いと感じる。 立根町に住んでいるが、陸前高田市の方や事業所を再建している人も多く、人口が増えると思う。 YSセンターには、プールやお風呂がある。釜石市の人から利用問い合わせも増えている。利用者が増えている。住宅以外の施設の復旧が後回しになっている。 安心して利用するには、安全で魅力的でなければならぬ。そういった施設整備が必要。
鈴木宏延委員	<ul style="list-style-type: none"> 多くの方が亡くなり、事業所が流失した。津波による犠牲者をださなまいちづくりが必要。 防災機能が高い、安全安心のまちづくりが不可欠。 住む人がいないのでは意味がないので、住む場所、職場があり、買物ができ、魅力的な楽しめる場所がある、住民が楽しめるまちとして復興するとよい。 防潮堤は7.5mで復旧するが、東日本大震災クラスの津波では浸水する。高齢者が集まる施設イメージもあるため、とれだけ避難さ

	<p>せられるかが課題。</p> <ul style="list-style-type: none"> 想定する避難者を収容する施設の検討も必要であり、車を持っている方は車で避難するため、避難路の確保も重要な要素。 復興の象徴となる中心市街地はまちづくりが必要。
炭釜秀一委員	<ul style="list-style-type: none"> 大船渡駅を中心とした賑わいが必要。交流人口の増大が図られることが必要。 商店街の早期復興、世代、市内外を間わない複合的な交流を進めるために、季節を感じる公園、シンボルタワー、観覧車、楽しいと思える施設整備、イベントの開催、ジオパーク構想のジオサイト、観光資源の発掘を考えていきたい。 子ども、高齢者に利用しやすい、防災機能を備えた拠点施設の整備が進められるように、他地域への先行事例としてよいものが残せるようにしたい。
武田貴子委員	<ul style="list-style-type: none"> 求人倍率が1.26倍になった。以前より仕事が発生しているが、働く人が減っている現状もある。産業を盛り上げると同時に、人を呼び戻すことが重要である。 まちづくりの拠点となり、活気のあるまち、住んでいる人が魅力を感じるまちなになれば、人もやってくる。 多様な働き方が必要であり、新たな枠組みや高齢者が生きがいを感じる活動のできる施設があれば、活気がでる。 大船渡市は海、山があり、子育てにはよい環境のまちである。自然と一緒に暮らしていきたいかしないと、大船渡には住めない。 体育館など子どもたちのための遊び場が必要であるが、有事の際に避難できる場所がすぐわかるようなまちづくりができないと、観光客もやっこない。
新沼信男委員	<ul style="list-style-type: none"> 街並み景観が重要である。 駅西側道路と東側道路を接続させる意見もあったが、JRとの関係がありうまくいかなかった経緯がある。 拠点が完成したら、大船渡の賑わいが創出できるところかどうかは難しい。観光客誘致が必要。観光を産業と捉えた仕掛けが必要。震災前もまちの中に見るものがなく、観光客は碇石海岸に行ってしまう。物産館は重要である。 道路は幅員を広くしたほうがよい。お祭りの好きなお祭りは20数万人を超える人出となる。津波がきた場合、お祭りに来た人をどう誘導して避難させるかが課題。夜間災害がおきていたら、もつと犠牲者は多かっただと思う。
平野智美委員	<ul style="list-style-type: none"> 2回目の健康調査を実施している。被災した方の関心は健康ではなく、暮らしがどうなっていくかで、保健師が回答に困っている。 子育て中であり、末崎町に住んでいるが、非常に不便。大船渡町にスーパーマーケットが開店するまで、買物も不便だった。夢商店街、屋台村など活気も出てきているが、余震や津波警報が出ることもあり、ゆっくりできずに、足が向きにくい。防潮堤は頑丈にならなくては思うが、安全面を確実にしないと、人は集まってくれないと思う。 道路、避難経路が重要。 福祉施設は何かあったときに、問題になる。あるのはよいが、有事の際を考えて拠点を整備すべき。 高齢者に住みやすいのはよいが、子育て支援施設、障がい者の施設も整備しないと、住みたいと思わない。全ての人が住みやすいまちづくりが重要。 以前の大船渡市は、人にやさしいまちづくりをしていたとは言えない。弱い人の立場でまちづくりを進めていくことが、住みやすいまちづくりにつながると考える。

5. 意見交換	
■質問への回答	
佐藤勝幸委員	<p>【図矢印について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ マグネットエリアとして機能することを示すため、図中に矢印を入れた。緑色の破線は、歩行者動線を意識した。青い線は、海側の自動車の動線を伝えるための矢印である。 ・ 道路イメージ図とあわせて見てもらうと、市全体の視点から、当該地区が位置づけられていることがわかる。
事務局	<p>【道路幅員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 都市計画道路は20m幅員の整備を検討している。
(1) オブザーバーからの意見・助言（各委員からの意見発表で得られたキーワード）	
佐藤勝幸委員	<p>【復興への思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中心部としての魅力ある場所にしたい。 ・ それには安全が必須条件である。 <p>【土地利用について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全を土地利用の方向性としてどうするか。 ・ 避難が確実にできることが重要で、道路の整備が柱。 ・ 夜間も安全に避難できる、観光客の避難、様々な方の安全性を確保することが魅力、賑わいにつながる。 ・ 道路をまちの「顔」、まちの骨格となるものとして位置づける。人、歴史、自然環境が重要な要素。 <p>【津波復興拠点に期待する役割】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 交流人口拡大に向けた観光施設の整備が必要、という意見があった。このような施設が雇用促進、観光振興につながるようにしたい。 ・ 配置や規模などを具体的に盛り込んでほしい、という意見があった。 ・ 導入したい機能としては、子どもの施設、未就学児支援が不足しているという指摘があった。 ・ 高齢者の避難の難しさの指摘は、安全性確保と表裏一体。十分に考えながら、高齢者等の施設の適切な機能配置を検討していきたい。 ・ 復興のスピードを、早期再建、事業がスピードアップのために導入されていることから、検討していきたい。 ・ 拠点から波及させて、市全体、気仙地域への波及効果を高めることが、共通認識として捉えられている。
(2) 補足・修正意見等	
久場清弘委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 核として大型店を誘致したいという商工会からの意見があるため、検討してほしい。
西郷真理子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全施設を市が所有するわけではないので、事業主体、マネジメントは、これが終わった後で検討するのか。
角田副市長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 都市計画決定に必要な要素を、検討してほしい。併行して行うところもあるため、意見をもらいたい。
西郷真理子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ この範囲全体をマネジメントするためには、市、商業者、企業がその仕組みを作っていくことが重要。そこに市民が入ると、なお、よくなる。
新沼信男委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電柱のないままも検討する必要がある。
佐々木輝昭委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夜間の避難に備えて、ソーラー灯も要所に設置したほうがよいと思う。
伊東 修委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3階以上の建物ははしご車対応となるが、電線、電柱が消防活動の支障になる。 ・ 商業者、飲食店、理容美容関係等、大船渡で再開したい人も多い。拠点として整備する区域が狭いという理由である。

	<ul style="list-style-type: none"> 若い人の起業支援、自分では資金がない人の起業がなんとかならないか、NPOからも、大船渡・陸前高田に残りたいが方法はないか、という相談がある。どこかにそういう人たちが配置できるように考えられないか。人を増やすことにつながる。商店街の事業者は60歳代以上が多いので、若い人が出店できるシステムを作ってほしい。 ロットがどのくらいか心配というご意見なので、議論として切り離すことはできないだろう。どうやって意見集約するか、考える必要がある。 公共施設と民間施設があり、両方を一度に議論することには、難しい面がある。このワーキングも、部会を設定して進めたほうがよいかどうかも、決めかねている。拠点の方向性は決めていきたいと思っている。 100%公費では整備できないので、民間や、経産省など他の省庁の制度をうまく活用する必要がある。このまちで、リスクをもつても店を出そうと思う人を支えるしくみづくりが大事。
角田副市長	
海山課長補佐	
西郷真理子委員	
6. 総括	
事務局	(キーワード整理について、委員に確認し、了承を得た。)

津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループ 第2回 議事要旨

平成24年11月14日(水)午後1時30分～3時50分

市役所 1階 第一会議室

1. 開会 (事務局)	
2. あいさつ (副市長)	
3. 議事録の確認	
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 議事録は、委員各位にご確認いただき、市のホームページに掲載する。意見修正等があれば、事務局に連絡してほしい。 ・ 前回記録の2点目の「一日も早い事業再開への思いが強い」の前に、「商業者は」を追加してほしい。
4. 資料説明 (事務局)	
5. 意見発表	
委員名	
新沼信男委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境未来都市の実現を目指すということなので、海側市街地では、電線類の地下埋設をして電柱を解消してほしい。 ・ 道路が広くても、自動車での避難が発生するため、避難者の道路の横断をどうするか、という問題がある。交差点に、仙台駅のようなデッキの自由通路を設置したらよいと思う。陸前高田市でも自動車での避難を検討しているのので、整備は必要である。 ・ 防災の考え方については、JRの嵩上げ5mをもとにして検討しているので、よいと思う ・ 駅を中心に訪れる観光客、自動車で訪れる人は駅に集まってくるので、駅周辺に駐車場が必要。市内のタクシー台数は120～130台あり、駅周辺で待機しているのので、対応を考える必要がある。 ・ デイサービス機能は、高齢者等が多く集まるので、いったん被災した場所に確保しなくてもよいのではないか。避難をどうするかという問題があり、どんなに万全でも想定外の災害は起きる。多目的スペースとして、希望する人が利用できれば十分ではないか。高齢者施設の機能を設ける必要はないと思う。 ・ 妊娠中のママタニ用品を買い手がなく、苦労している。求めるものが少なく、盛岡市や北上市、ネット通販で購入した。被災後はママタニ用品を扱う店がなく、妊婦さんが苦労している。ベビー用品も扱う店がないので、出店してほしい。 ・ 災害危険区域に指定されると、福祉施設等は建築できなくなる。このイメージ図と食い違いが生じている。 ・ 庁内で災害危険区域指定と区域内の建築物の制限の案について、説明しているところである。その内容とイメージ図とは整合していないので、ご容赦いただきたい。
角田副市長 事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料3ページの避難誘致図であるが、拠点区域周辺は幅員20mの道路が整備されるので、避難ルートは示されている。だが、震災当日は、国道45号が渋滞した。土地区画整理事業では、時間的な課題があり、国道整備に着手できないことは理解できるが、国道との交差点で避難の流れが止まってしまう。歩行者と自動車の、避難時の経路の分離も問題になってくると考える。 ・ 拠点エリアからの避難は、徒歩を想定しているが、集客のための自動車のための自動車利用は多く、どうしても自動車での避難となる。国道との交差がスムーズにできる方法が必要である。 ・ 津波復興拠点には、コンセプトをもった検討が必要である。エリア一体がまとまりがあり、共通のイメージで施設整備ができるとよい。 ・ 被災した事業所にとっては、ハード整備は負担が大きいので、行政でハード整備をして、テナントで商売を行う。そうすれば、事業者が撤退しても、新規の事業者を募集することも考えられる。
伊勢徳雄委員	

伊東修委員	<ul style="list-style-type: none"> 被災したところからの避難については、縦方向に山側に逃げればこわくないのではないかと、最終的にどこに逃げればよいか、自動車が進まずに、ここまで走ってくださいますかという場所を決めて、広く避難場所を整備してほしい。商店街も、住民も、多くの人が、個別面談時に公園を要望した。広々とした避難場所が、公園として整備できないかという思いもあるので、市の考え方を教えてほしい。 「道の駅」のような施設で、海に特化して大船渡らしい施設として整備していいか。 市各課に相談することも多いが、担当する複数の課にそれぞれ相談するのではなく、中心となる課を一本化してもらいたい。
伊藤怜子委員	<ul style="list-style-type: none"> どのくらいスペースが示されてないので、各機能の空間についてイメージできない。 ある任意団体が、災害前に河川敷で防災訓練があり、交代でスタッフが参加した。災害後、ボランティアを市に申し出たが、自宅待機を言い渡され、役に立たなかったのがよくやしかったことだった。 災害時に困ったこととして、赤ちゃんと泣かれること、おむつやミルクに困った、とのアンケート結果を聞いている。避難所となった公民館でも高齢者に目がいて、妊婦や赤ちゃんと声を出せない状況だった。赤ちゃんと母親も疲れて不安になるので、ケアは大事である。 子育ては24時間の仕事であり、災害に係らず支援の拠点として、母親がほっとする空間があるとよい。親子で話ができ、愚痴をこぼしたりできる場があると、和やかに子育てできると思う。 母乳は重要であるが、そばにいて教えなければわからない若いママも多い。母乳推進は災害時にも対応できる。盛小学校では、新生児室を作って、大船渡病院の産後の母親を受け入れてケアした。お湯も水もないが、ミルクは多くあり、母乳の力に救われた。親子が一体となって乗り越えられる。母乳のトラブルもなく、1ヶ月無事にすごして帰宅した。大船渡病院では母乳トレーニングをしてくれたのがよかった。
植村公一委員	<ul style="list-style-type: none"> 商業・業務の機能として、開業当初から成り立ち商業環境形成が重要。何人の方が、どのくらいスペースで店を作るか、の需要を早期に把握することが必要である。 大船渡の強みである、魚を食べたり買ったりする場所、ホテルなど必要である。 約3割の住民が、戻って住み続けたいという意向を持っていると聞いている。店舗の上に住居があったほうが、賑わいが出るので、拠点内で対策を検討すべきである。 再生エネルギーの活用については、太陽光発電所の基地を整備し、約30%の電力を賄うことを検討している。マイクログリッドシステムをこの規模で構築するのは、全国発の試みとなる。道路整備でも、直流の街路灯システムを提案したい。 木質バイオマスを、熱源の供給システムとして設置したい。 防災機能に留意した、地域包括システムの構築が必要で、高齢になって住める環境整備、バリアフリー整備を進めることが重要である。在宅医療・介護の先進事例を構築することになり、高齢者が、おのずとまちの中で運動できる仕組みを検討したい。 大船渡の特徴である美しい建物、まちづくりが重要。気仙の木造住宅、気仙の商店のまちづくりが考えられる。
金野寿江委員	<ul style="list-style-type: none"> 震災当日は立根小学校に避難し、帰宅できなくて泊まった。トイレが一番困った。子供で和式だと、高齢者が使えない、ポータブルトイレもあったが、高齢者はトイレをがまんしていた。高齢者が安心して避難できる体制を作してほしい。 デイサービスは1事業所しか参入できないので、利用者が限定されてしまう。利用者は自宅とデイサービスや病院を往復する生活で、知人との交流がなくなっている。事業所同士、異なるデイサービスの利用者が、相互に交流できるスペースになってほしい。 22歳の息子は、市外に遊びに行く。盛岡市にあるような総合的なアミューズメント施設や映画館が、大船渡にはない。大船渡であれば、若い人も大船渡に集まってくる。若い世代も大船渡に足を運ぶまちづくりがよい。24時間、灯が消えないまちが理想。

<p>久場清弘委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 商工会議所で検討されている内容を前回紹介した。補足と次の展開を提案したい。 ・ 駅を中心とした施設配置、軸の設定であるが、商業施設が3箇所に分けることを想定した理由を教えてください。 ・ 駐車場と商業施設のバランスの、判断材料を教えてください。施設利用者数と駐車台数に食い違いがあるので、駐車台数にあわせて利用者数の設定が必要である。 ・ 道の駅の事業者、商業施設事業者が誰かを決めて、検討すべきである。市が全体を運営するのはむずかしいため、土地の分譲が前提となると、大型店の誘致が難しくなる。土地を購入できる事業者は限られる。商業施設は事業期間が短いので、事業者は内装費程度しか投資できない。「道の駅」が想定されている広い土地を購入して事業を成立させるには、かなり大変である。 ・ 駐車場は、商業施設にあった規模が必要である。商業施設が共同で駐車場確保する場合は、公共的な役割が強くなるため、公共運営でできるかがキーとなる。 ・ 須崎川から南の商業施設のブロックと、駅前のブロックの間の20m幅員の道路は坂道になるので、沿道の土地利用にとっては差し障りがある。道路側からのアクセスは、避難時には活用できる道路ではあるが、階段等で上り下りすることも発生するため、南北の軸の形成は難しい。土地の中で盛土すると、土地がつかいにくくなる。 ・ 商業集積を1箇所にまとめる発想とすると、須崎川から南のブロックに集積することが考えられる。どのように商業施設で埋めていくか、どのくらい土地を買える事業者がいるかを検討する必要がある。 ・ 駅前のブロックの土地も賃貸にならないか。大型店周辺に商業集積を図る場合、駅前の商業集積は、どのような位置づけになるかなどを検討してほしい。 ・ 観光客に対しては、道の駅は対応できるが、従前事業者が対応できるかが課題となる。週末主体の観光商売は厳しく、平日も集客できるビジネスでないと、事業者は生活できない。 ・ 南側に拠点区域を拡大し、大型店を含めた商業集積について、検討してほしい。その場合、土地は賃貸で検討してほしい。事業費は国が負担するが、賃貸としての活用は可能である。市が民間から買い上げ、整備後に民間に分譲することが原則ではあるが、市有地の場合は、市が管理する仕組みになっている。賃貸であれば、駐車場も事業者が管理・負担することも可能であるので、道筋を検討してほしい。 ・ 道の駅を想定するなら、駅に近いほうに配置するほうがよい。平日は駅利用者が駐車場を利用するパーク＆ライドの利用の位置づけが可能となる。週末は道の駅として利用すれば、駅と道の駅をセットにできるのではないか。
<p>佐々木輝昭委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 避難については、国道45号の拡幅が必要である。 ・ 避難路となる道路と国道45号との交差点に、避難のための大型の歩道橋を整備してほしい。花火大会の時には、何万人も人が集まる。消防署や消防団で警備する、どこに避難させるかが問題になった。大きな避難用の歩道橋を数箇所、避難路上に整備すれば、山側の避難目標物にもなる。地理に不案内でもわかることが必要である。 ・ ヘリコプターの離着陸には、直径17m以上の空地が必要である。ヘリコプターの重量は約7tということなので、それにあつた構造物とする必要がある。 ・ 津波防災拠点施設の避難場所機能は、避難タワーであると思うが、有効であると思う。 ・ 福祉施設については、平野委員の意見と同様である。 ・ 観覧車などを設ける意見が、前回のワーキングで提案されたが、屋上への観覧車の設置はヘリコプターの支障になるので、別の場所に設置してほしい。また、ヘリコプターの離着陸のため、拠点施設の周囲に高い建物はないほうがよい。

志田 寿委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国道 45 号が避難上の問題となる。津波復興拠点区域内は問題ないが、渋滞したらどうするかが課題である。 ・ 自動車での避難が、市街地内、海側から発生するが、自動車を収容できる広い場所がない。今回の災害では、末崎町、陸前高田市方面が渋滞した。加茂神社から永沢は、国道 45 号しか道路がないため、迂回道路を山側に整備する、三陸自動車道に大船渡病院付近から入れるようにするなど、自動車が国道 45 号に集中しない方法を検討してほしい。 ・ 自動車も財産で、商店街で仕事している人も自宅が心配で、どうしても自動車を使うことになる。渋滞しない方法を検討してほしい。 ・ 照明もできるだけたくさん整備して、避難に向けた対応をしてほしい。 ・ JR から山側の市街地の避難計画は、まだできていないと思うので、それもふまえて海側の計画も検討することが必要である。 ・ 水産加工場等の予定地は、業者の車両もかなり入ってくる。商用の車両の避難経路を含めた検討が必要である。 ・ 南三陸町の総合防災庁舎のように、いかにも安全に見える施設を建てると、想定以上の津波が来た際に大変なことになるので、必要最小限のスペースと物資等を確保すればよいと考える。 ・ 被災前は、大型店を中心として店舗が集積してできた市街地だったが、今後もそのようなまちでよいと思う。今回の計画の商業施設は分散して配置されている。高齢者が多くなる中で、あちこちに自動車を止めて利用するように見えるので、一箇所に集約したほうがよい。 ・ 須崎川の桜並木であるが、花のある所に人が集まるので、エリア全体を花の名所にすれば、もっと人が集まると思う。
鈴木宏延委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域防災計画の改訂を進めており、避難所の検討をしているところである。 ・ 浸水することを前提とすると、津波復興拠点が立地する場所は安全ではないので、迅速に避難できる環境を整備することが必要になり、避難が対策の軸となる。 ・ 今回の災害では、想定をこえる被害が発生しているため、想定外の被害を前提とした対策を検討する必要がある。 ・ 避難の原則的な考え方として、段階的に高台に避難すること、目標地点をJR 踏切とすること、災害の状況に応じて避難することは、妥当と考える。ただし、要援護者が高台に避難するためには、時間的な課題があるため、検討が必要である。 ・ 浸水区域内に避難場所機能を持たせることになるので、身体的、時間的に余裕のない人が津波防災施設に避難する考え方となる。そのため、避難場所として大きなスペースは必要なく、備蓄も最低限として周知すればよいと思う。 ・ 国道 45 号との交差点部での自動車避難の課題は、他の委員の皆さんの指摘どおりである。ハード整備が必要な課題であるため、極力、徒歩避難の徹底を固めていきたい。 ・ 津波防災施設は応急活動の拠点となっているが、浸水区域にあることから、あくまで避難所としてしか活用できないのではないかと。ペDESTリアンデッキが浸水しない高さとなっているが、デッキ自体が安全と誤解されない表現にしたほうがよい。 ・ 避難誘導標識の整備によって、環境は整えられる。災害発生時の情報を伝えて避難行動をとってもらうことが第一なので、避難に対する意識の醸成も含めて啓発すれば、安全は確保できると思う。 ・ 内陸にあるような大型店舗を大船渡に誘致しても、継続した商業活動ができるかについては、疑問を持っている。撤退することもあるので、地域に根ざした、生業として商業活動している事業所を視野に入れたほうがよい。 ・ 被災を活かした形、災害資料の展示、防災研修できる施設を入れたほうが、内外から人が集まるのではないかと。
鈴木佑典委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ BRT は仮設で、鉄道の本復旧を行うなら、JR 線との踏切をどうするかについて、避難道路を整備する際に検討する必要がある。 ・ 津波はいつくるかわからないので、災害発生を考えると検討する必要がある。 ・ 山側とのつながりがあるのがあっての海側市街地なので、関係づけながら検討する必要がある。 ・ 避難の方法、避難する道路の周知、誘導・指示も大事である。県道を下船渡方向に行って避難できた人もいるので、避難誘導も検討す

	<p>る必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 大型客船に係る施設も設置することも必要である。駐車場なども必要である。 全ての人が15分で避難するには、人の支援も必要で、ソフト面での指導、避難支援などの教育も重要である。マニュアルではうまくない。実際の状況に照らした訓練が必要である。人間関係の教育も考えて、避難誘導を考える必要がある。 道の駅は大船渡にもできればよいと思うが、土地の取得の問題がある。山側の人たちが復興について話し合ったときも、土地の広さによって所有者の考え方が異なっていた。ひとつにまとめるのはむずかしいと思う。ひとつにまとめるにはどんな方法があるか、熱意をもって納得できる動きをしないと、相手の心も動かせない。 5世帯の合意形成で高台移転ができるが、海側の事業者は、高台に自宅を持っていて、海側は店舗だけという場合も多い。5世帯がまとまって移転することもむずかしいという声もある。 小さなことも関係づけながら企画していく必要がある。早く実現できればよい。中途半端にならない、夢のある計画になるとよい。 全ての人が確実に避難できるという目標に向けて、多種多様な人の避難に向けた標識、誘導灯、複数のルート整備が必要である。 観光地のラーメンマップのような、避難の視点でまちを歩き、観光にもつながるマップを作成すると、商業振興も図れるのではないか、タイアップする方法を考えた。 昔の大船渡商店街の屋根のように、雨天でも利用できる全天候型への対応が必要である。 多種多様な店が一箇所に集まったほうが、利用しやすいと考える。 駐車場を一箇所に集約すると、イベントにも活用できる。 被災した遺構を保存するなど、メモリアルホールという名称で、防災教育ができる施設、市民が交流できる施設があるとよい。
<p>炭釜秀一委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> 私たちは津波を経験したので、避難が重要なことはわかっているが、100年後に災害を経験していない人が、避難できるようにしなければならぬ。避難路や避難場所の確保は、今回の整備で行う必要がある。道路は将来的にも骨格を変えないので、必要な施設である。来街者にもわかる避難経路が必要である。 マップの中に、避難ルートや必要な防災意識を記載しているとよいと思う。 大船渡町は被災前から商業のまちで、行政機能は盛町にある。商店街の再生にプラスαがないと、集客は見込めない。ランドマークとなる観光資源が必要である。 津波防災拠点施設のグループホームであるが、海側には高齢者等が長い時間、滞在しないほうがよい。山側に整備してほしい。 室内の軽運動場があるとよい。高齢者の介護予防の運動、レクリエーション、子どもの活動に使え、有事の際には、一次避難場所として活用できる。その上に展望台があり、ヘリポートを整備するとよい。 震災前の倍の高さの防潮堤が整備されるため、海が見えなくなる。津波も見えないので、展望台が必要である。展望台には、街並みが一望できる魅力がある。 客船飛鳥IIの乗客からは、海から見るまちの美しさを教えてもらっている。高い建物はないほうがよい。 海側には運動できるグラウンド、ランニングコースのある公園があれば、地域の人、市外のスポーツ大会に来る人も集まり、商業に活気がでる。
<p>武田貴子委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> 私たちが津波を経験したので、避難が重要なことはわかっているが、100年後に災害を経験していない人が、避難できるようにしなければならぬ。避難路や避難場所の確保は、今回の整備で行う必要がある。道路は将来的にも骨格を変えないので、必要な施設である。来街者にもわかる避難経路が必要である。 マップの中に、避難ルートや必要な防災意識を記載しているとよいと思う。 大船渡町は被災前から商業のまちで、行政機能は盛町にある。商店街の再生にプラスαがないと、集客は見込めない。ランドマークとなる観光資源が必要である。 津波防災拠点施設のグループホームであるが、海側には高齢者等が長い時間、滞在しないほうがよい。山側に整備してほしい。 室内の軽運動場があるとよい。高齢者の介護予防の運動、レクリエーション、子どもの活動に使え、有事の際には、一次避難場所として活用できる。その上に展望台があり、ヘリポートを整備するとよい。 震災前の倍の高さの防潮堤が整備されるため、海が見えなくなる。津波も見えないので、展望台が必要である。展望台には、街並みが一望できる魅力がある。 客船飛鳥IIの乗客からは、海から見るまちの美しさを教えてもらっている。高い建物はないほうがよい。 海側には運動できるグラウンド、ランニングコースのある公園があれば、地域の人、市外のスポーツ大会に来る人も集まり、商業に活気がでる。
<p>6. 意見交換</p>	
<p>(1) オブザーバーからの意見・助言（各委員からの意見発表の概要）</p>	

佐藤勝幸委員	<p>【安全・安心について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 避難に関する意見は、概ね出揃った。 ・ 自動車避難の視点が、検討課題となる。津波復興拠点区域だけで解決できない課題であることから、地域防災計画も含め、市全体の課題として検討する。 ・ 拠点の中の避難の考え方は理解できたが、避難の教育をしっかりと行い、将来につなげていくことが必要である。 <p>【商業・業務機能について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まちの持続性に向けては、マタニティ、赤ちゃんの育児、総合的なアミューズメント施設などが提案された。 ・ 拠点がランドマークになるようにという視点でのご意見があり、軽運動、人が集まることのできる施設機能の提案があった。 ・ 景観の観点から電線類の地中化が提案された。安全性にも希与することもあり、景観に配慮した夢のあるまちづくりを展開する意見をお願いした。 ・ 全天候型、防災教育・交流機能が提案された。 ・ 駐車場については、イベントスペースとしての活用も提案された。 ・ 高齢者施設については災害危険区域との関係もあるが、安全性を十分に検討することとする。デザインサービスではなく、機能を限定せず、多様な人が活用できる施設という提案として、まとめていく。 ・ 商業施設の配置について、津波復興拠点整備事業は全て土地を分譲するのではなく、賃貸もできる、建物の床を市が貸すこともできる事業であるため、事業者の意向を踏まえて検討する。拡大エリアもあわせ、全体のボリューム、商業施設の集約の仕方等を検討する。 ・ 高齢者施設の機能については、災害危険区域内の建築制限の考え方と整合しないところがあったことをお詫びする。 ・ 大船渡駅周辺地区の住民は、高齢者は約7割、殆どが単身または2人世帯で、そのうち4割が戻ってきて住みたいという意向を持っている。全体が整備されるまでには時間がかかるため、生活再建をどのようにするかを検討する必要がある。たたき台に提案した。 ・ 公園の整備について、土地区画整理事業では、地区面積の3%以上の公園面積を確保する必要がある。公園の位置や規模はまだ未定で、検討中である。資料が準備でき次第、地元説明会等で、公園の配置や利用目的等をご説明していく。 ・ 相談窓口の一本化は、今後の検討課題である。 ・ 今回の津波の浸水高さを教えてほしいと、多くの人から要望をもらっている。浸水範囲、高さの表示板を設置してほしい。 ・ 対応したい。 ・ 多くの委員から商業エリアの集積の意見がでたが、拠点整備イメージ図に変更の余地はあるか。事業者の声を反映させ、より使いやすく集客が見込めるように、という要望があった場合、今の図面を大幅に見直すことも考えられる。 ・ 図面はあくまでイメージ図であるため、検討の結果、大幅な見直しが必要である場合では対応できる。環境未来都市構想の中で取り入れられる意見も反映させる必要がある。 ・ 意見集約がむずかしい事項もあると考えられるため、ワーキングで方向性をいただいた後は、管理運営も含めた検討案を提示し、深めていく。具体的な提案をいただければ、案を積み上げていきたい。 ・ 次回は11月28日、場所は保健介護センターで開催する。機能についての検討を行うため、意見ももらいたい。
7. 総括 事務局	<p>(意見発表の概要について、委員に確認し、了承を得た。)</p>

津波復興拠点整備事業まちづくりワーキンググループ 第3回 議事要旨

平成24年11月28日(水) 午後1時30分～3時15分
保健介護センター 2階 会議室

1. 開会 (事務局)	
2. あいさつ (副市長)	
3. 資料説明 (事務局)	
4. 意見発表	
伊東修委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業者の立場での意見であるが、商工会議所の「震災後の商店街を考える委員会」から、商業、業務、観光等の施設が入る地域について、いっしょにやっということうというメンバーを募って業種構成、まちなみの作り方について、12月10日までに意見を集約し、考える会から市に提出する予定である。次回ワーキングに間に合うように検討するので、お願いしたい。そのためにも、ワーキング委員の方にも、ご参加をいただきたいので協力をお願いする。 ・ 事務局としても、協力する。
事務局	
伊藤怜子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 災害前から気仙管内では、出産施設は1箇所、岩手県外では珍しくない助産院はなく、もともと、子育て環境に恵まれていなかった。育児の悩み、不安を抱えているおおかさんが、この地域にはたくさんいる。相談できる人がいない状況に加え、今回の災害で相談相手を失った人も多い。 ・ 行政の窓口も利用されおらず、子育て環境、支援が行き届かない時代である。行政施策としての子育て支援の実態を、良く知っていたいただきたい。利用されているか、支援になっているか、もう一度確認してほしい。子育て支援は行政だけでは行き届かない。きめ細かい支援には民間との協働が必要である。子育て支援の主役は育児をしている母親なので、主役を含めた運営を検討してほしい。 ・ 子育て支援に前向きな自治体の事例を参考に、新たな支援策の構築が必要である。 ・ 最も望むことは、母親たちが身近な窓口として利用することである。利用しやすいことと、集える場の提供などが必要である。子育て関連の窓口はあるものの、案内チラシはコンビニや市内チャラシはコンビニや市役所など、目についたところにはない。窓口で一括して情報提供できることが望ましい。 ・ 相談窓口を訪れるおおかさんは、何らかの閉塞感や問題を抱えているので、子育て支援員、アドバイザーが常駐して、いつでもなんでもよいという広く受け入れる対応が必要である。24時間電話対応もしてほしい。 ・ 地域の団体と協働で窓口を運営するのも一案。窓口から地域に、子育て状況を発信できている。子育ての悩みは、はずかしい、自分が至らないから子育てできなくなってしまう。子どもを愛せないという問題も起きてきているので、地域で子育てすることが必要だが、それができなくなっているのが、現在。40年前は産婆さんがいて、家庭訪問して、若い母親の力になっていた。 ・ どこに相談にいけばよいか迷うことが多いので、子育て関連の機関をネットワーク化する必要がある。子育て支援のプロ、アドバイザーもいるが、主役は母親。母親を側面からサポートすることが大事。 ・ 7ページの図面であるが、子育て支援拠点の機能のある津波復興拠点支援施設と、駐車場が離れて配置されている。子育て中の母親は乳母車や荷物を持って来るので、駐車場の近くに子育て支援施設があると、雨天でも便利なので検討してほしい。
植村公一委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気仙地域は環境未来都市の指定を受けている、全国12市のひとつ。エネルギーの30%を再生可能エネルギーで賄う計画があるので、津波復興拠点整備でも、具体的なまちづくりの骨子として内容に加えて欲しい。マイクログリッドシステムは、節電でき、かつ、災害時

	<p>に電力供給できるシステムなので、資料を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 公共施設についても、建物の省エネ化を進めて欲しい。エネルギーのマナネジメントシステム、ピーク時の電力確保と災害時に自家発電ができる機能なので、盛り込んでほしい。 ・ 建築物については、統一性をもった拠点となるよう、ガイドラインやデザインコードを作るなども盛り込んでほしい。 ・ 公共施設でも、官民連携を進めてほしい。まちの中心になるので、市の窓口、住民票発行などの行政窓口を作ってほしい。 ・ 市民のニーズの高い、公共性のある施設を、官民連携で整備してほしい。民間がはいることによって市民ニーズを捉えた運営をしてほしい。 ・ 津波復興拠点整備事業では、公益施設の建物は国費100%で整備されることになる。PFI方式が多く取り入れられるようになっていて、官民連携のしくみを作ってほしい。運営は民間の力で行うなど、民間活力を活かすしくみを入れてもらいたい。愛知県の図書館の事例では、民間で運営したり、喫茶店が協働して本を読みながらお茶が飲める、子どもの遊び場を併設するなどの取組みがある。市民サービスとして、スポーツや文化ホールなどを設けて、民間で運営する取組みを進めてほしい。 ・ 大船渡では、高速バスのターミナルがあつて賑わっていた時代があつたと聞いている。観光も含め、外部の人が訪れる効果があるので、高速バスとの連携も考えられる。
<p>金野寿江委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の在宅介護のご家族は、安売りのチラシが届いても、買物に外出できないという状況を聞いている。キッズルームのように、高齢者を預けて家族が買物できる施設があると思う。 ・ 中尊寺のほうで、車道を砂利道、歩道を舗装している事例がある。車がゆっくり走り回る効果があるということなので、取り入れたい。 ・ 普段はマンホールの蓋だが、災害時にトイレになる仕組みの事例を、テレビで見たい。トイレは災害時に大事なので、震災時にトイレとして使える工夫は役立つと思うので、取り入れてほしい。 ・ 高齢者に、津波復興拠点に何があるとよいかと尋ねたら、温泉があるとよいと話していた。海のそばのまちなので、海水を利用した温泉がよい、という意見をいただいた。 ・ 高齢者の介護のために、思うように外出できない方にも配慮した施設にしてほしい。資格をもった介護者をもつた家族が外出できるよくなると思う。
<p>久場清弘委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公共施設については、特にコメントはないが、商業に関係する部分で気づいた点がある。 ・ 資料7ページのC・Eの商業業務施設に「テナント店舗（建物は行政で整備）」とあるが、民間にとつてはありがたいが、実際に可能であるか。今の段階での意見集約ということであれば、「テナント店舗（入居者の負担が少ない）」という表現のほうがよい。 ・ Dの観光施設は「道の駅」と記載されているが、このワーキングでの意見交換の中では、産直市場のイメージに近いものとなる。道の駅は国交省の事業になるので、「地場産品を売るお店」というように、幅広く理解できるように表現したほうがよい。 ・ 前回議事録の修正点であるが、3ページ「駐車場も、このような台数が必要なければ、もっと狭くできる」という記載は、駐車場台数が不足するのではないかという意図での発言であつたので、「駐車場は、商業施設にあつた規模が必要」に修正してほしい。また、「パーク&ライドの利用の位置づけが必要である」という記載は、道の駅の有効利用を図る意図での発言であつたので、パーク&ライドの利用の位置づけが可能となる」に修正してほしい。
<p>佐々木輝昭委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回、前々回の意見は網羅されているので、これでよいと思う。 ・ 消防と地域防災計画が協働した機能を、津波防災拠点施設に整備してもらいたい。 ・ 7ページの資料の「道路・歩道」に加えてほしいが、避難歩道橋が、建物から直接歩道橋につながっていればよい。仙台のペデストリアンデッキのような整備がなされれば、人の動き、山側と海側のアクセスもよくなる。

志田 寿委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 防災関係の機能は、これでよいと思う。 ・ 施設については、金融関係の機能も配置されるということなので、住民票や印鑑証明の発行などの行政サービスがあれば、便利だと思う。 ・ 図書館というよりも、高校生が勉強できる小部屋をいくつか設けるとよいと思う。陸前高田市方面に帰宅する学生が、待ち時間をつぶすことができる。
新沼信男委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ ぜひ入れてほしい機能として、津波防災学習ができる施設がある。博物館のようなシアターが施設にあれば、多方面からのツアーがきても津波の状況を説明し、学んでもらえる。 ・ スペースがあれば、大船渡市でも職の観点、工芸品、木工の技術などの展示ができる機能も入れてほしい。名取市が取り組んでいる事例もある。 ・ 夜の花火大会などお祭りががあるので、人が集中する夜間の安全対策をすべき。大船渡駅を新築して、屋根をかける話もでていたので、安全性確保をしっかりとりたい。 ・ 植栽について、7ページの図には桜並木などがあるが、大船渡は椿の里、椿でまちおこしをしている。桜と椿を交互に植栽すると、2月の椿、4月の桜で、紅白の桜で、紅白の桜でたい花となる。最近、椿も見なおされてきていて、種苗でふやす取組みをしている団体もあるので、お願いしたい。
鈴木佑典委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 司会者をお願いだが、適切でない表現を言ってしまうことがある。「津波にあった甲斐のある」という言葉があるが、傷つく人もいる。変な言葉づかいがあったら、指摘してほしい。「ピンチはチャンス」というのが、家族を亡くした人にとっては、チャンスにはならないので、注意したい。 ・ 施設が機能するための配慮について、お話しする。防災施設の情報収集伝達機能として、防潮堤の水門の開閉を自動でやったところもあるが、しまったかどうか不安を持っている人もいる。 ・ 避難所は個室がない。引きこもりの人の中には、逃げなかつた人もある。誰もいないので安心で、ひとりのほうがよいといって、避難所に行かなかつた。ダンボール1枚でもしきりをつければ、安心していられるようになるので、避難所に引きこもりの人への対応をお願いしたい。 ・ 大船渡市でも文化祭などを開催しており、いろいろな方がいろいろな作品をつくっている。文化で大船渡の復興、という考えもある。市民の作品を展示する場所があるとよい。 ・ たくさんの人がまちを訪れると、まちの案内所も必要で、案内者の養成も必要。 ・ 緑のある施設ということだが、人と人との何気ない楽しいおしゃべりが役に立っている。ベンチがあり、通りすがりの人とおしゃべりする中で心安らぐことがある。ベンチを置く、緑を植えることが必要。 ・ 植物の選定は大事で、国道から大船渡駅におりるところに木が植えられると、虫などで苦情が出ていた。樹種の選定に注意が必要。公園の樹木の落ち葉を個人の方が掃いてゴミに出したら、個人の落ち葉は収集できないと言われたというトラブルがあった。十分に機能が発揮される、意味のある楽しいまちづくりには、目に見えない配慮がたくさん必要。
白土美都委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅周辺に住み続けたい人にとっては、最低限、従来の生活環境を取り戻すことが必要。もともとあった地方銀行、信用金庫、郵便局、交番などが必要。新たに整備するものとして、赤ちやんからお年寄り、障がい者もみんなが使いやすいトイレ、市民活動など、誰でも利用できる会議室、私書箱などがあるといい。 ・ 防災機能としては、一時的に避難することが想定されるため、最低限の備蓄、衛星電話の設置があるといい。 ・ 観光客のための貸し自転車があるとよい。 ・ 交通機能は、バス発着所としてだけでなく、3年後にはJRが復旧することなので、定期券購入所ができると便利になる。

鈴木宏延委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ JR 大船渡線から海側は浸水するため、施設周辺は浸水してしまふ。資料 4 ページに情報収集機能として避難誘導室があるが、災害初動時に役割を果たせるかどうか疑問である。防災機能としては、拠点区域の人の一時的避難所としての機能が考えられる。市で指定している避難所に移動するまで、環境を整えられるまでの数日間をしのげる避難所機能、物資、通信手段を確保できれば、防災拠点として役割を果たせる。 ・ 施設配置で抜けていた視点として、高齢者や避難に時間を要する人が集まるので、災害時、この施設が避難所としても機能しなかった場合でも安全に避難できるのか、という視点を取り入れて配置等を検討するとよい。 ・ 意識啓発機能としての防災研修室は、資料展示のみではなく、防災アドバイザーの常駐によるアドバイス、自主防災組織の訓練などができれば、地域防災力が向上する。体験学習ができる機能を盛り込むとよい。 ・ 医療モールも、災害時の観点では、インフルエンザ患者などの隔離が必要になるので、検討が必要である。 ・ この場所に自分が行きたいなと思えないとうまくないと考えている。 ・ ひとつの場所を目標とするのではなく、例えば、市民活動支援センターにだけ行くのではなく、別のフロアには防災教育のスペースがあって、津波や地震の体験室、消防などの体験室があり、被災遺構を見て、展望室に行き、食事ができるなど、人の動線をイメージして考えるとよい。公共公益施設内の動線があり、商業施設へ行く動線があって、買い物、食事の動線、ガイドマップがあってまちを歩く。まちを循環する、点ではなく線で循環する、その中心となる施設になるとよい。
炭釜秀一委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大船渡町はもともと商業のまちで、船で港に入ってきた人が飲食店、商店を利用して、商業機能が増えて、震災前のまちができたと言っている。
武田貴子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大船渡町は市内で最も人口、世帯数が多いので、観光等の中で、観光等の前に、住んでいる人にとって使いやすいまちになってほしい。それに加えて、まちの顔となるランドマークを整備すると、交流人口がふえる。 ・ 公共公益施設としては、交番、駅、交流施設、以前は茶々丸ホールがあったが、活動できる場所があるとよい。 ・ 室内軽運動場は、子育て、スポーツ少年の活動、高齢者の集いの場となる。 ・ 海側には、ランニングコースや遊歩道のある公園、総合運動公園のようなものがあると、商業振興にもなる。 ・ 母親としてお願いしたいのだが、7 ページの図面の中に、公園のような遊具施設を設置してほしい。買物途中に子どもを遊ばせる、ベンチがあつていろいろいるな人と話ができる場所があるといい。子どもを飽きさせないで買物に連れて行くのは大変で、公園も減ってしまったので、できれば自動車と離れた場所に、子どもを遊ばせる場所があればよい。
平野智美委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が高齢になって住むことを考えてみると、郵便局、農協など金融機関、食材や生活雑貨のお店、薬局、ガソリンスタンド、バスやタクシーの乗場、病院と調剤薬局があるが、最低限、日常生活は困らない。 ・ 生きがいや楽しみのためには、本屋、レンタルビデオ、家電販売、イベントのできる交流スペース、カルチャーセンター。温泉施設は、高齢者は好きで、入浴と食事ができゆつたりできると、地域の人もよいし、観光資源になり、買物もできてよい。 ・ 夢はたくさんあり、考えるのは楽しいが、安全面ははずせない。 ・ 行政機能は住民票発行程度にして、楽しんで帰れることを目標として、検討するとよい。いろいろあればよいものはあるが、なじまないものもあると思うし、自分の意思で行って、帰ってこられる場所であればよい。 ・ 防災拠点施設には、有事の際の一次的な避難の場所、支援施設には多目的スペース、カルチャーセンターのもの、陶芸などの活動ができる場所があればよい。 ・ 住居は被災しない場所にあるのが基本だと思うので、山側に公営住宅、コレクティブハウス、グループホームなど、民間が運営できる建物を建てて、自力再建できない人に住んでももらい、海側の拠点に向かって、楽しみに下りてくる流れでよい。

	<ul style="list-style-type: none"> 赤崎、末崎など、市のはじっこが取り残されている感がある。見放されている、という声もある。真ん中は大事だが、はじっこの人たちのことも考えて動かないと、三陸町まで含めて市全体が復興していく姿が見えないと不安という意見を聞く。全て行政が行うわけではなく、みんなが前進する動きが見えるとよい。 JRから山側の嵩上げ、防潮堤ができ、海側は浸水でき、海側は浸水するとプールになると。避難できなかつた人たちのための一時的な避難施設を設けることは必要だが、避難所に指定されたところが被災して多くの方が亡くなった事実がある。一時的な避難所にした場合も、指示に従わず、自己判断で山をめざす人もいると思うので、施設整備にあわせて、避難指示を徹底しないとむずかしい。 資料7ページにも駐車場の集約化が記載されており、必要な駐車台数もある程度準備することになるが、自動車は財産で、市外から来る人、家族の心配をする人など、自動車で移動することになると、出口で詰まってしまう。植栽などが描かれているが、駐車場に通常の入口以外に、災害時の避難用の出入り口を設けると、避難の際には有効なのではないか。 テナント店について、業者の方からは、建物まで整備してもらえと助かるという意見を聞く。市が直接貸し店舗を運営するのはむずかしいので、行政との間に入る組織を立ち上げて運営し、被災事業者の負担を減らせる事業再開、支援につながる施設整備ができるとよい。
<p>5. 意見交換</p> <p>(1) オブザーバー (各委員からの意見発表の概要)</p>	
<p>佐藤勝幸委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> 指摘をいただいた津波復興支援施設と駐車場の配置であるが、津波復興支援施設にも駐車場を確保した案となっている。駐車場の位置と利用者の利便性については、今後も検討していく。 今回いただいた意見は、個室が必要など、施設について、かなり具体的に、収斂された内容となっている。施設の運営、事業化に向けた内容まで、ご提案をいただいた。 情報提供の窓口の一本化についてのご意見もあった。ひとつの窓口として整理してはどうかとの指摘であった。 新たなご意見としては、高齢者も預かる機能があつて、介護者が買物できるように、という意見があつた。高齢者施設の配置はむずかしい面があるが、何らかの形で手当てする必要がある。 人が集まりやすくなる機能として、ベンチ、回遊できるマップなどのご意見があつたが、集まりやすい、快適、というソフトな機能として整理することができるとよい。おもてなしのしつらえとして配慮し、集まりやすい施設として検討する必要がある。 個別の具体的な検討を進めていく必要があるのでは、具体的に施設がイメージできるとりまとめをしていきたい。
<p>事務局</p>	<ul style="list-style-type: none"> 事務局から補足する。 今回は提言書の形にとりまとめを踏っていく。 今後の方針として、資料3ページにあるように、個別ワーキングを新たに設置して、具体的に検討していきたいと考えている。今回の提案を提言書としてまとめられた後、提言書をもとに、公共施設、民間施設、エリアマネジメントの3つの個別ワーキングを設置したい。施設詳細についてもみながら、エリアでの魅力を高めるために全体統括するエリアマネジメント、景観も含めて、外部有識者を変え、内部組織との合同のワーキングで煮詰めていきたい。 次のワーキングについても、何らかの形でご協力いただくとともに、新たな力を加えて再構築し、魅力あるエリアづくりに取り組みんでいきたい。 補足意見等ありましたらいただきたい。

(2) 委員からの補足意見等	
志田 寿委員	・ 避難誘導本部室とあるが、常駐で24時間機能するという考えか、有事の時に向向くイメージなのか。管理人がいて、無線等が使えるのか、どのような管理を考えているか。
事務局	・ 職員常駐など、具体的な対応はまだ考えていない。防災拠点として、本部に使える場所があればいい、というイメージである。具体的には、個別ワーキングが必要、不要も含めて議論を進めてきたい。今回は、方向性としてどうかということでお示しし、よいということであれば、提言書に取り入れていく。
角田副市長	・ いろいろな機能を資料でお示しているが、行政、民間など調整が必要なものが多い。検討する上でイメージは必要だということ、このような形でご提示した。
6. 総括	
事務局	(意見発表の概要について、委員に確認し、了承を得た。)

